

# ポストコロナ時代における 日韓異文化理解授業の模索 — フィールドワークの成果を手掛かりに —

Junsub BAE<sup>※</sup>

Searching for Japanese-Korean Cross-Cultural Understanding Classes  
in the Post-Covid-19 Era:  
Based on the Results of Fieldwork

ベ ジュンソブ

The Seminar for Developing Self-Reliance VI, which was implemented in FY 2019, when Japan-Korea relations were said to be at their worst point, has the goal of understanding Korea, a country both near and far, through their own experiences. Before the Covid-19 pandemic, in FY 2019, the students were encouraged to develop their own awareness of the issues in order to have a productive discussion with local students in Seoul, while incorporating simple reading, listening, and speaking exercises. After completing the on-site training, which lasted three days and two nights, the students communicated their own impressions of Korea to each other and made suggestions regarding the future development of Japan-Korea relations. The purpose of this report is to reflect on the first training in Korea and to serve as a reference for future classes.

Keywords: Korea, History, Fieldwork

## 1. はじめに

本稿は、コロナ禍以前の2019年度の「自立力育成ゼミⅥ」において実践したフィールドワークの取り組みをもとに、ポストコロナ時代における韓国学習ニーズへの対応及び、学生の新しい興味・関心の発掘をどのように行うべきなのかを考察するものである。

筆者は、韓国に関する学習を媒介として学生の自立力を向上させることを目標に、これまでの授業を構成してきた。周知の通り日韓関係は、近年最悪とされているものの、若者を中心とする韓国への関心はそれとは裏腹に、前例のない高い水準を示している。

金庚芬(2017)によると、日本の大学生は、韓国について、「ドラマ・映画・音楽」「レ

---

キーワード：韓国，歴史，フィールドワーク

※ 本学非常勤講師

ジャー・旅行」「ことば・文学」「社会・生活」「伝統文化」などへの関心が高いと言われている。実際に、本学での初回授業で学生たちに本授業を履修した理由を聞いた際にもコスメやアイドル、お菓子といった表層的なものが中心であった。

授業では、このような関心を持った学生たちが、韓国研修に向けてそれぞれの興味関心に沿って研究を進め、さらに生まれた疑問点を解消するために現地調査を行うという形をとった。担当教員として、コスメやアイドルといった一見表層的に見える学生たちの関心を否定することなく、そこからいかに興味の窓を多方面に広げていくのかということが課題であった。

また、日本の大学生は、韓国に関する情報を主にインターネットから収集しているが、(金庚芬 2017)、インターネットは特に、自分の関心のある分野に関する情報だけを手に入れてしまう危険性を孕んでいる。情報の量は、過去に比べてはるかに多くなっているものの、実際に現代の若者が接する情報の幅は、過去に比べて小さくなっている可能性すらあるのである。

そこで、筆者は日本のマスメディアだけではなく、韓国現地のマスメディアも同時に参考することによって、より客観的に韓国を理解することができると考えてきた。しかし、実際は、それほど簡単な問題ではなかった。日本国内で接する、韓国に関する多くのニュースが掲載される、日本の大手ネットメディアである yahoo! ニュースや若者がよく目にする LINE ニュースは、韓国のニュースメディア記事が日本語に翻訳されたものが中心であるが、特に 2019 年における韓国国内の主要メディアは、文在寅政権への批判で溢れていた<sup>1</sup>。学生本人が、多様なニュースソースに触れていると思っていても、実際には偏ったメディアに触れていた可能性が非常に高かったのである。

韓国社会のあり方を理解しない限り、いくらマスメディアの情報を参考にするとしても、そこからは、韓国の一断面しか見えてこない(木村 2012)。誤解を恐れずに言うのであれば、「自立力育成ゼミⅥ」の授業は、日韓両国のマスメディアによって取捨選択された情報に触れてきた学生たちに、マスメディアで言われていることを単純に信じるのではなく、それが本当に韓国に存在する姿なのであるか、実際にその目で見つめ、「批判的」な目でこれまでの常識を問い直す思考力を再構築することを目的としていた。

以下の本論では、まず、コロナ禍以前の 2019 年度に実施した「自立力育成ゼミⅥ」の授業内容を概観した後、韓国での現地調査から筆者が観察した韓国への興味・関心の特徴をまとめる。そして、コロナ禍の影響を直に受け、現地での交流ができなくなった学生たちが、同じテーマの下で学習した結果、どのようなことを考えたのか、実践報告を行うことにより、今後韓国に興味を持つ学生たちの興味・関心に答えながらもこれまで気づいていなかった新しい問題関心を目覚めさせることで自立力を大きく伸ばす授業の在り方について考えてみたい。

## 2. 2019 年度授業の概要

日韓関係が最悪の局面に突入していた 2019 年度(李 2021; 小出 2022)から実施している「自立力育成ゼミⅥ」は、近くて遠い国と言われる韓国の「近さ」と「遠さ」を「わたし」という窓を通して理解していくことを授業の目的と設定している。コロナ禍

以前の2019年度には、ソウルでの異文化交流を念頭に、簡単な読む・聴く・話すトレーニングを取り入れながら、自分なりの問題意識を高めるようにした。また、2泊3日の日程で実施した現地調査終了後は、自分の目と肌で感じた韓国を伝え合い、今後あるべき日韓の関係づくりの提案を行った。これらの授業内容を通し、以下の2点に到達することを目標とした。

- ① マスメディアやインターネットによって流される情報を単純に鵜呑みにするのではなく、事実に基づいて正しく判断できる。
- ② 自分独自の視点を持って、日本以外の国の人との関係づくりの手がかりを持つ。

授業の内容に関しては、できるだけ日本社会には伝わってこない「韓国の事情」を中心に説明しようと心がけた。その背景には、筆者自身が、日韓関係悪化の根本的な要因の一つとして、お互いに対する知識不足が最も大きい影響を与えていると考えていたことがあげられる。過去に比べ、韓国に関する情報量が圧倒的に増えたことは間違いない。しかし、実際には、断片的に並べられている多くの情報がむしろ新しい知識の吸収を邪魔しているとも言える現状が生まれているのである。相手の文脈を知らないまま、表面的なことだけで物事を判断することで誤解が生まれるわけである<sup>2</sup>。したがって、「自立力育成ゼミⅥ」においては、「比較」の観点を中心に、韓国の事情を説明しようとした。それを通じて単なる韓国に対する知識ではなく、「比較」というレンズを通じて日本社会のことももう一度見つめ直すというサブ目標を設定した。

以下に、研修に向けて行った授業のシラバス及び授業内容の概要を記載する。2019年度の授業においては、受講者数が12人で、その内、3年生が10人、2年生が2人の構成であった。

1. ダイナミックコリア：初回の授業では、現在学生たちが持つ韓国のイメージをブレインストーミングさせた。その後、劇的な変化を成し遂げた韓国の経済について、視聴覚資料を用いた説明を行った。
2. ハングルの読み方・書き方1、韓国の歴史と社会1：2回目の授業からは、韓国語の教材を活用しながら、韓国語の歴史や日本語との類似点・相違点について紹介した。特に、韓国語特有の発音の難しさについて、英語の発音の仕方との比較を通じて自然に理解できるように工夫した。また、それと同時に、日本の江戸時代以前から植民地期までの歴史について学習する時間を設けた。
3. ハングル文字の読み方・書き方2、韓国の歴史と社会2：2回目の授業に引き続き、韓国語の文字の読み方・書き方を学習する時間を設けるとともに、独立後から現代までの韓国近現代史を学習する時間を設けた。
4. 韓国語会話1・日韓関係1：4回目の授業からは、現地で交流会を行う際に、自己紹介をすることができるようになることを目標に、簡単な韓国語挨拶表現を学習した。また、古代から植民地期までの韓国の歴史を日韓関係の視点から再整理した。
5. 韓国語会話2・日韓関係2：韓国の独立後から現在までの歴史を、日韓関係の観点から再整理する時間を設けた。
6. 韓国語会話3・韓流と韓国1：韓流の歴史を時期別に分け、今の若者が直接感じたことのない第1世代韓流ブームと、今の若者が韓国に高い関心を持つきっかけとなった第2世代韓流ブームとの比較を通じてその特徴を明らかにした。

7. 韓国語会話 4・韓国の文化：韓国の伝統的な食文化・衣服を紹介しながら、和食文化、着物文化との比較を行った。
8. 韓国語会話 5・韓国の教育：韓国の教育課程を日本の教育課程と比較しながら、その特徴を明らかにした。特に、激しい競争を強いられる韓国の子どもの私教育の現状、韓国の大学生が就職することの困難さを、日本との比較を交えながら学習した。
9. 調査課題の選定：現地で調査したいテーマを各自で選定し、事前調査を行った。最初に各グループで自主調査のテーマを決めるようにした際には、ほとんどのグループが単純に韓国の食べ物、韓国のコスメ、韓国のカフェなど表層的なテーマを取り上げていた。テーマ選定理由に関しても、「普段友達とよく韓国料理を食べるから」など単純なものが多かった。そこで、個人旅行ではなく、現地調査を行う意義を説明した後、それをさらに深掘できるように誘導した。結果的に、以下の4つのグループに分かれて調査を行った。
  - A グループ：日韓の食文化比較
  - B グループ：韓国の観光資源の広報戦略
  - C グループ：日韓の経済関係（不買運動の実態）
  - D グループ：韓国の伝統文化
10. 事前課題発表：渡航前に調べた内容を発表する時間を設けた後、教員やクラスメイトからフィードバックを行い、現地で調査する内容を精査した。
- 11～15. 韓国フィールドワーク

### 3. 事前授業を通じて

受講者全員が韓国への高い関心を抱える一方で、韓国語の学習経験や韓国への渡航経験は、学生たちの間で大きな違いがあった。そこで、10回という限られた時間の制約の中で、韓国現地での最小限のコミュニケーションができるように、韓国語の文字の読み方・書き方や基礎会話の練習時間を毎回の授業の中で30分間設定した。それと同時に、学生たちが韓国に関心を持つテーマもサブカルチャーから始まり歴史まで多様であったため、普段は関心がなかったテーマについても興味を持ってもらい、韓国に対する多様な見方を身に付けるように工夫した。

最初の授業では、今の若者が抱えている韓国のイメージと高齢者が抱えている韓国のイメージの違いがあることを確認し、なぜそのような認識の世代間格差が生じることになったのかを韓国の急速な変化の側面から説明した。本授業では、現代の社会問題を説明する際にも、特に歴史の側面に重点を当てたが、その理由は、現在の表面的現象の理解だけでは、なぜ韓国でそのような現象が起きているのか、なぜ日本とは違うのかが理解できないと考えたためである。

そこで、日韓関係と関わる重要な歴史的出来事について、日本での教育内容と韓国の教育内容を紹介し、同一人物に対する正反対の評価がなぜ成立し得るのかについて説明した<sup>3</sup>。ここでは、単純にお互いの意見が違うことだけではなく、どのようなロジックによってそのような意見の相違が発生するのかを説明することに焦点を当てた。また、それと同時に、長いタイム

スパンで見た場合、日韓関係の歴史は友好な関係の時期が相対的に長かったことを認識することによって、短期的理解への注意を促した。そして、韓流に関しても世代別韓流の特徴変化を時代背景の説明とともに行うことによって、日韓関係の相対的観察の重要性を明らかにした。

文化に関しては、韓国での現地調査に当たって、基本的な韓国のマナーなどについてレクチャーした。一見同じように見える食文化でも実は小さい違いが大きく存在することについて学習することで、カルチャーショックの疑似体験を行った。

教育問題については、日韓の大学生の生活を中心に、その違いを説明し、労働市場の構造との関係において、その位置付けが異なることを説明した。厳しい競争社会であるがゆえに発展が早いものの、それに伴う弊害も発生している点についてもしっかりと認識すべきであるということを強調した。また、韓国現地で行う韓国の大学生との交流の際に、お互いの生活について比較できるように工夫した。

#### 4. 韓国学生との現地交流から

韓国現地で実施したメインプログラムの一つとして2019年11月30日に行った韓国学生との交流会においては、内閣府主催の日韓青年親善交流事業の既参加者など、日韓交流に関心を持つ大学生5名を募集し、参加を依頼した。日本青年との交流を希望した、ソウル市内の大学に通う韓国人青年5人は、皆日本語専攻ではなかったが、ほぼ全員日本語が堪能であった。交流会は、短い時間の中で韓国の文化に触れながら自然に会話ができるように、韓国の伝統料理を味わいながら会議室としてのスペースを利用できる施設において3時間程度行った。食事と共に行うアイスブレイキングの時間を設けた。その後、グループに分かれて現地視察を行った。

交流会では、学生たちは、まずお互いの国に関するイメージについてレクリエーションを行った後、それぞれのグループが事前に用意した調査テーマに従って、韓国人青年に質問をしていった。学生たちは、「交流会の質問を、もう少し考えておけばよかった」というコメントから分かるように、疑問を持つことは相手の文化へ関心を持っていることを示す方法であると感じたようだ。また、「お互いの言語が喋れなくてもコミュニケーションできた」というコメントが代表するように、オンラインアプリケーション、英単語、現地学生の日本語を駆使しながら、どのチームも問題なく活動を行うことができていた。英語で交流ができるか、日本人学生は韓国語が話せるのか、など交流を行う際には言語の心配はつきものであるが、話し合う内容をしっかりと考えていくことで、問題なく学び合えると言えるだろう。

韓国の餅について調査を行ったチームは、「韓国青年と実際に話すと、餅についてはあまり特別視していないような印象を受けた。実際に私たちが同じように質問をされていたとしても、同様の反応していたかもしれない」とコメントを残した。外国人に、質問をする際には、現地の人だから伝統文化を知っていると思い込みがちだが、自分たちに置き換えて考えることで、自国文化を軽視しがちであることを学生は学んだようである。また、学生たちは、交流会に参加した韓国青年の特徴をしっかりと理解した上で、彼らの意見が韓国国民全体を代表するわけではないことをしっかりと自覚していた。

交流会の反省点としては、同じグループが同一の韓国青年に同じ質問を行っており、報

告書の内容に多様性があまり観察されなかったことが挙げられる。現地での交流会は、調査グループとは別のグループを形成した方が、より多様な交流ができると考えられる。



写真1 韓国人青年との意見交換

## 5. 西大門刑務所歴史館の訪問から

韓国社会の過去・現在・未来を同時に体験できるように工夫した韓国研修は、日韓関係の過去を象徴する施設として、植民地時代の経験に基づく施設である西大門刑務所歴史館を訪問した。西大門刑務所のような歴史的に敏感な場所を訪問する際には、事前に韓国側での位置づけを説明し、過激な描写があるということを説明した。当初は学生たちが拒絶反応を示すのではないかと心配し、訪問を希望しない学生には代替の選択肢を提示した。しかし、参加者全員が積極的に訪問の意思を表明した。

西大門刑務所歴史館は、「韓民族の受難と苦痛を象徴した西大門刑務所を保存・展示している博物館である。日本帝国主義時代には、祖国の独立を勝ち取ろうと日本帝国主義に立ち向かって戦った独立運動家達や、解放後の独裁政権期には、民主化を成そうと独裁政権に立ち向かって戦った民主化運動家達が監獄暮らしの苦しみを味わい、犠牲になった現場である。このような苦難の歴史にも屈服せず、韓民族は世界史上類例がない短期間で独立と民主化を成し遂げた。まさにその底力と精神が宿っている西大門刑務所歴史館は、大韓民国の独立と民主に向けた闘争の歴史がこめられている現場である」（ホームページより抜粋、原文ママ）とされる場所である。

特に、韓国に関する学習では、歴史教育における両国のギャップをいかに埋めるのが課題であると考えられる。実際に、現地調査前の座学では、多くの学生が日本の歴史教育に関する問題点を指摘した。しかし、その一方で、より広い視野に立って、それを相対化する必要もある。つまり、「日本の歴史教育において韓国の植民地支配期の分量が少ない」などの単純な批判ではなく、なぜそのような歴史教育が行われるようになったのか、他の国ではどのように歴史が教えられているのかなどを総合的に理解した上で、日韓の歴史教育の特徴を理解する必要があると言えるだろう。

学生は、「韓国に対してだけではなく、自分の目で見ていないことでも周りの意見を鵜呑みにして偏見を持っていたものがあつたのではないかと自分を省みた」「答えが出ないからこそ議論の余地が広い日韓関係」といったコメントを残している。西大門刑務所歴史

館の見学は、単純に過去の歴史に止まらず、その歴史が、いまの韓国の子どもたちにどのように教育されているのか、また韓国の国民はそれをどのように受け止めているのかを肌で体験・観察できるという意味においても、過去・現在・未来をつなぐシンボルとして理解することができる。



写真2 西大門刑務所でアプリに書かれた日本語の説明を  
食い入るように見つめる学生たち

## 6. 学生の窓からみた韓国

研修2日目の夜、学生たちは画用紙に自分の心の窓を描き、自分の窓から見えた韓国を4つの漢字で表し、研修で学んだことを発表した。学生が示した漢字は、以下の通りである。  
「恨・日・食・魅」「語・旗・建・集」「辛・美・親・考」「好・味・人・楽」「優・勉・返・食」「美・楽・好・学」「繁・初・優・充」「優・荒・赤・挑」「優・気・悔・学」「優・安・学・見」「親・輝・痛・友」「交・歴・寒・楽」



写真3 学生の窓からみた韓国

特に指示はしなかったにも関わらず、どの学生も、現地に行ったからこそ表現できるものを必ず一つは挙げていた。ある学生は「日本で『韓国は恨の国』という言葉聞いたことはあったが、西大門刑務所で、人々の恨みによって成長することができない『恨の木』

を目にしたことに非常に衝撃を受けた。いつまでも、昔のことをひきずって。。。と思っていたが、そのような言葉では片づけられない。私たちに過去の責任はないかもしれないが、その歴史の上に立っている私たちは過去と向きあう責任がある」とコメントを残した。

また、「考え方やモノの見方など視野を広くもっていたと思ったけど、実際に行ってみたらまったくそんなことはなかったと自分の未熟さを痛感した」という学生のコメントに現れるように、これまで見たくない暗い部分の直視と心の痛みを伴う傾聴、この2つを学生たちが短期間に精一杯自分の窓を開けて試みたことが、彼らの振り返りから見えた。きれいな風景・おいしい匂い・楽しい音楽が流れてくる方への窓は開けていたものの、これまで閉めていた別の窓が自分の中にあることに学生たちは気づいたようである。画用紙に書いた4つの窓に、一人ずつが記した4つの漢字を寄せ合い、最後に48の窓を開けた。こののち、ささやかでも確実に新しい風を呼び込むであろう12人の48の窓。私は、この窓を希望と呼びたい。

## 7. コロナ禍以降の授業より

2020年度からは、コロナ禍の影響で韓国研修を行うことができなかった。そのため、学生には、基本的には2019年度と同様のシラバスではあるが、視聴覚教材を多く活用するとともに受講生同士のディスカッションの時間を増やすことで少しでも自分の狭い情報収集の枠から離れ、より広い視野と問題意識を持ってもらうことを目指した。なお、2020年度からは、韓国語学習や韓国への渡航経験が全くない学生を優先的に選抜した。その理由は、韓国滞在の経験が長い学生と韓国経験が全くない学生が一つのクラスで活動を行うと、どうしても経験値の差から全員に満足できる授業を組み立てることが難しいと考えたためである。その結果、韓国への漠然とした関心を抱く学生が2019年度より増えた。したがって、2020年度からは、学生たちの漠然で幅の狭い興味関心そのものに多様性をもたすための工夫を行った。

一方で、2019年度の授業において、座学の段階での興味関心から韓国現地調査参加後の興味関心に一定の質的变化があったことに着目し、敢えて学生たちの興味・関心に対応する形での授業構成ではなく、教員自身から積極的に学生が新しい興味関心を見つけるように多様なテーマに触れることを意識した。例えば、2019年度の授業において、韓国の歴史に対して関心を持つ学生は少なかったものの、韓国の現地訪問後には歴史に対する関心が非常に高くなったことが明らかになった。もし、授業に参加した学生たちの興味・関心に応えるための授業構成を考える場合には、どうしても偏ったシラバス構成になりがちである。そこで、例えば、歴史に関しては、現代史を背景とした映画を題材としたり、現在の韓国社会の姿を間接体験する意味からYoutubeなどの映像資料を積極的に活用し、受講生が興味を失うことなく、これまで気づいていなかった韓国の隠れていた部分に興味を持つようにした。特に、映像資料の利用に当たっては、単に映像物を鑑賞するのではなく、歴史や文化的背景についての説明を必ず行うように心掛けた。

1学期間の授業の最後には学生たちが「日韓がお互いから学び合えるもの」という視点でレポートを作成した。ここでは、学生たちのレポートからKH Coder<sup>4</sup>を用いて共起ネットワークを作成し、それを分析することにより、学生たちの興味関心のある分野を洗いだ



し、韓国現地研修が再開された際の授業展開の参考にする。分析に先立ち、思う・考える・感じるという表現はどの文章にもみられるため、削除した。また、「少子」「高齢」は少子高齢化として、「日本」「韓国」は日韓としての意見が多かったため複合語として強制抽出を行った。

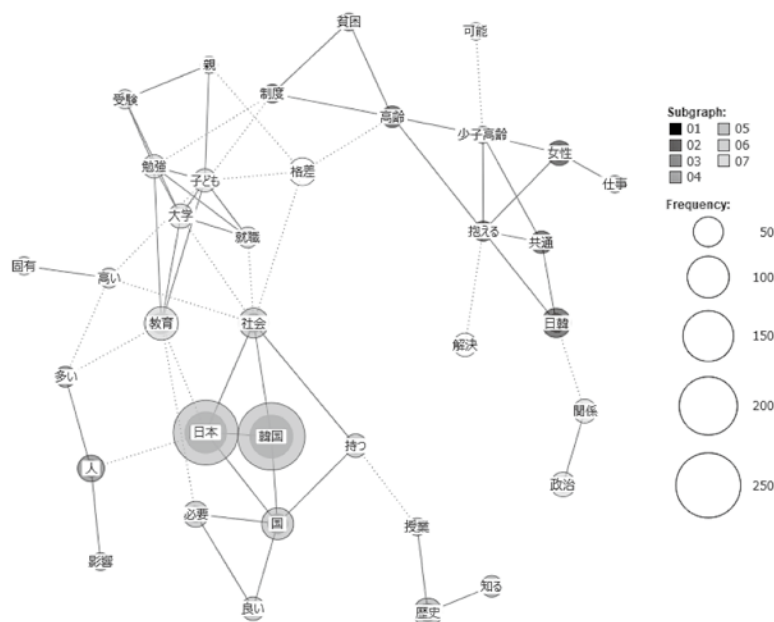


図1 日韓がお互いに学び合うべき事象

分析の結果、大きく4つのテーマを表出した。1つ目のテーマとして、「日韓のお互いの国でより良い点を学ぶ必要がある」という項目が挙げられる。実際の学生の言葉として、「日本と韓国が互いに認め合う必要がある。つまり相手の国の良さを認め、素直に学ぶ姿勢を持つということだ」「どちらも学ぶべき点があるものの、お互いの文化や考えを尊重する必要もある」などが見られた。学生たちがお互いの国から学び合う、良さを認めるという視点を持つことは重要であるが、これだけでは具体的に何を韓国の良い点として学生が考えているのかが見えてこない。具体的には他のテーマを考察することで学生の意見がより良く見えてくる。

2つめのテーマとして、女性が仕事をする上で解決すべき問題を抱えていること及び、社会保障制度に多くの問題を抱えていることが挙げられた。実際の学生の言葉として、「日本も韓国も女性の社会進出が欧米諸国に比べて遅れているため、産休・育休制度がまだ十分ではないと感じる。また、家事・育児は女性がやるものという考えが浸透していて、男性の育児休暇取得率もまだまだ低い。こうした問題を一つ一つ解決していくことが少子化を止めるためには必要である」「日本と韓国の両国が抱える問題に少子高齢化がある。少子高齢化の問題を解決するためには、両国とも子育てしやすい社会をつくる必要があると考える」また、「急速に高齢化が進んでいる日本と韓国では、年金制度や医療福祉の充実等が必要だと考える」などのコメントがあげられる。日韓関係が悪化している中で、日韓

関係改善のきっかけとなることの一つが、日韓両国が共に抱えている課題に対する解決策を一緒に模索することであると考えられる。

3つ目のテーマとして、歴史教育の在り方が挙げられる。実際の学生の言葉として、「日韓の教育における歴史の教え方の違いについて、授業を通じて学ぶこととなり、これまでは関心のなかった歴史を知る機会となった「学ぶ歴史を統一することで、片方の国からの偏った事実が改善されれば、今より偏見なくお互いの国のことを知れるのではないかと思います」「まず自国の歴史教育を韓国のように力を入れるべきであると考えられる。韓国では自国の歴史についてとても詳しく教え、そして日本では考えられないほど力を入れていることを講義で学んだ。日本では「歴史」という授業はあるものの、ただの暗記物という科目の認識で学んでいる学生がほとんどで、自国の歴史に対して何も感じていないだろう。しかし、韓国のように自分の国について深く理解することは大事なのではないかと考えられる」「日韓関係において過去の認識の違いが大きな影響を与えていると考える。日本が韓国から学んでほしいこととして、歴史や政治にもう少し興味を示し、自分事として捉えることである。歴史においては、テストに出るから覚えなければならないというように学んでいる人が多い傾向がある。表面上での歴史として、これは何年に起きた（国）と（国）の戦いであり、（国）が勝ち、賠償金や土地の受け渡しが行われた。というような解釈を日本はしがちである。これだけではなく、戦った国の社会情勢や現在のその国との関係にも目を向けるべきである。韓国は歴史問題の再発見が今も続いている。政治においては、日本は投票率が低すぎる。」などがあった。

学生たちがこれまで受けてきた日本の歴史教育について相対化することができたという点では意味があったが、一方的に「日本の歴史教育は真実を教えない」と考えるのではなく、どの国においても自国中心の歴史教育が行われていることなど、より広い視野を持つことが望ましいだろう。また、ややもすれば、韓国の歴史教育に対して、誤解を生む可能性が高い。日本の学生が自国の歴史教育に対して持つようになった感情に対して、韓国の学生は、自国の歴史教育についてどのような感情を持っているのか確認するプロセスが必要であると考えられる。

4つめのテーマとして、親が子どもの教育に高い関心を持っていることや大きい影響を与えているという概念（金香男 2019）が挙げられる。韓国の社会問題を反映した流行語であった「金のスプーン」、「土のスプーン」が日本でも「親ガチャ」という表現として現れるようになった。韓国で深刻な社会問題となった格差問題を通じて、「一億総中流社会」と言われたように、長い間認知されてこなかった日本の格差問題が再認識されるきっかけとなったと言えるだろう。

実際の学生の言葉として、「韓国と日本は大学進学率が高く、多額の教育資金がかかることも少子化が進んでいる原因だと考える。特に韓国の塾の多さには驚いた。塾に入れないと学校の勉強についていけず、進学もできない可能性があるのが現状である。貧困家庭の子どもも一般家庭の子どもと同じように勉強して大学まで進学できる環境を整える必要がある」というものがあつた。コロナ禍における大学生の貧困問題や返済型奨学金制度の問題が日本のマスメディアで取り上げられるようになったことが示すように、これまで見えてこなかった問題が、コロナ禍の中で「再発見」された側面が強い。そして、その発見の補助線として韓国の経験が一定の役割を果たしているとも言えるかもしれない。

一方、これまでの歴史は、主に日本が先に抱えていた課題に対して、その解決策を韓国が参考にするパターンが多かった。しかし、少子化の問題に対しては、むしろ韓国の方が先進的な取り組みを行っていることを確認することもできた<sup>5</sup>。少子高齢化問題に対して、日韓両国はお互いに学ぶ余地が多く存在している。韓国社会が抱えている深刻な社会問題である高齢者の貧困問題に対しては、日本の経験が大きく参考になる。その一方で、近年の少子化問題や家族政策に対する韓国政府の積極的姿勢は日本政府の政策対応を考える上で重要な参考事例となり得る。一方、日韓両国とも急速に進行する少子高齢化の中で、いかに持続可能な社会保障制度を構築すべきなのかという共通の課題を抱えている。上述したように、日韓関係の改善の第一歩は、同じ方向を向く政策目標に対する、お互いの政策学習の側面から進める方法が考えられるだろう。

以上で確認した学生たちの感想をいくつかのポイントでまとめると、日韓両国がお互いの国のことについて、より理解する必要性を提起していると言えるだろう。女性の社会進出、貧困問題、高齢化、歴史教育、これらは学生たちにとっても関心があるテーマであると言える。

## 8. ポストコロナ時代の異文化交流授業に向けて

今後、コロナ後の授業を構想するに当たっては、このような学生たちの意見を参考にし、学生がより深い課題設定を行い、韓国で現地調査ができるように授業内容を構成する必要があると考えられる。そこで手始めに 2022 年度はまず前述してきたような教授メニューを最初の一か月間実施し、その後韓国大学生とのオンライン交流を軸に AB 二つのチームを作り、それぞれ異なる二つの実践授業を展開する計画を立てた。A チームは漢城大学学生との 1 対 1 交流を毎週一回 90 分計 8 回積み上げて毎回レポートを提出し、全受講生とシェアする。B チームはグループで計画を立て、釜山外国語大学の学生と日韓の文学作品の紹介や朗読をシェアするオンラインイベントを実施し、その成果を全受講生とシェアするというものである。未だリアルな実地体験ができない中で、異なる二つの手法をもって自己の興味関心の枠を広げ、先入観を壊していく作業を繰り返す意義とその成果を、今後検証していく予定である。

## 9. 終わりに

コロナの影響により、韓国での現地調査ができなくなり、できるだけ座学の中で韓国のイメージを描きやすいように、Youtube の映像など多様な視聴覚教材を用いた授業を展開した。しかし、直接現地に行って見て、聞いて、匂って、味わってみることに敵うことはないことを改めて実感した。韓国での歴史教育の仕方を座学でいくら説明しても、直接現地に行って、韓国の子どもの反応を見ることには敵わないだろうし、実際の韓国の大学生に聞いてみることに及ばないだろう。しかし、それと同時に、とりあえず現地に行けばいいという問題でもないことも同時に明らかにされた。「知るほど見える」という表現があるように、現地調査に向かう前に、しっかりと背景知識を蓄積しておかないと、単なる観光に終わってしまうリスクが非常に高い。座学と現地調査のバランスをうまく調

整すること、また座学のコンテンツと現地調査のコンテンツとの調和の側面から授業を構成する必要性について改めて考えるきっかけとなった。コロナ後、学生の興味・関心に答えながらも学生たちが成長できるよう、新たに計画した 2022 年度の授業成果をもとに、さらなる授業の発展を目指していくこととする。

## 注

- <sup>1</sup> 韓国の主要新聞社 4 社の内、大手 3 社は保守的性格が強く、当時の文在寅政権とは対立的関係が強かった。そして、日本の大手ネットメディアにおいては、閲覧者数の多さなどの理由から韓国の保守系メディアによる記事が頻繁に取り上げられる構造ができていた。
- <sup>2</sup> 例えば、相手の家を訪問した際に韓国では靴を外向きに揃えない。ここだけを切り取るとマナーがないように日本人には映るかもしれないが、韓国人にとってみれば訪問した瞬間から帰る時のことをすでに考えて靴を外向きに揃える事の方が失礼であると考ええる。つまり背景を知れば両国とも相手への気遣いの上に行なっている点は同じであると気づくだろう。
- <sup>3</sup> 例えば、安重根に対する日本の評価は、伊藤博文を殺した悪者として扱われているが、韓国での評価は、国民的英雄である。
- <sup>4</sup> KH Coder は、テキスト型データの計量的な内容分析のためのフリーソフトウェアである。言葉のグループ化を行うことができるため、レポート内容のコンセプトを探索するために利用した。
- <sup>5</sup> これまで、韓国の社会政策は日本に比べ、遅れていると認識されてきた。しかし、近年、韓国では無償保育が行われるなど家族政策を中心に急速に制度が拡大されており、日本の社会政策研究者からも注目を浴びている。

## 参考文献

- 李炯喆（2021）「私の中の日韓関係」『長崎県立大学研究紀要』6、15 - 23 頁。
- 金庚芬（2017）「日本の大学生の韓国、韓国人、韓国語に対する好感度：韓国語学習者・非学習者別に」『明星大学研究紀要人文学部』53、17 - 26 頁。
- 金香男（2019）「韓国の教育と就職事情」新城道彦・浅羽祐樹・金香男・春木育美『知りたくなる韓国』有斐閣。
- 木村幹（2012）『徹底検証韓国論の通説・俗説：日韓対立の感情 VS. 論理』中央公論新社。
- 小出稔（2022）「文在寅政権下の日韓論：最悪の日韓関係を日本はどう語ったか」『創価法学』51（3）、25 - 48 頁。
- 西大門刑務所歴史館ホームページ <https://www.sscmc.or.kr/foreign/jp/introduction.html>（最終接続日：2022 年 9 月 21 日）